

青森県におけるりんごの歴史 (明治期から昭和初期)と現状



日本曹達株式会社 技術顧問
長内 敬明
Yoshiaki Osanai

1. りんごの歴史（明治期から昭和初期）

青森県にりんごが導入されたのは明治8年(1875)4月で、内務省勧業寮から青森県庁にりんごの苗木3本が配布されたのが始まりと言われている。また、同年に米国人宣教師ジョン・イング牧師が、キリスト降誕祭に教え子や信者達に「りんご」を西洋りんごとして初めて青森県に紹介している。平成27年には弘前市でりんご栽植140周年を祝った。

一方、安政年間(1854～1860)に増上寺に贈られた苗木が浄土宗の門徒によって弘前藩浪岡村に移植され、これが青森県の西洋りんごの発祥であるというロマンに満ちた説があるが、確証に乏しく、残念ながらこれからの検証に任されている。

ところで、和りんごといわれる在来りんごは鎌倉時代中頃に中国から伝わり、江戸時代になって各地に普及したとされる。この和りんごと区別するために、田中芳男(明治7年内務省勧業寮勤務)は西洋りんごを「^{りんご}苹果」、和りんごを「^{りんご}林檎」と書くことにした。

これにちなんだ面白い話がある。現在のりんご研究所は、昭和6年に開設されたが当時の名称は「青森県苹果試験場」であった。「苹果」を「へいか」とも読むことから、地域の人たちの中には、天皇陛下が何度か訪問されているため、これにちなんで苹果試験場だと思っている人もいた。

話があちこちに飛んだが、配布されたりんご苗木は、廃藩置県後、失業武士達の就農対策として取り入れられた。旧弘前藩士菊池楯衛(青森りんごの開祖)の熱心な栽培技術普及とこれに続く熱心なりんご士族等によってりんご栽培は広がりを見せた。その後、西洋りんごは見た目も大きく味も良いことか

ら、高値で取り引きされるようになった。そのため、農業者も巻き込み、広大なりんご園を開園するものも現れた。

明治24年には青森、上野間の鉄道が開通したことにより、大量のりんごが東京で販売されるようになった。また、明治32年には青森の果実商堀内喜代治がロシア領ウラジオストック港にりんごを直接輸出した。

このように、順風満帆かに思えたりんご産業であったが、これに立ちはだかるものがあつた。それは病害虫の蔓延であつた。明治30年代に入り、モニリア病、腐らん病、リンゴワタムシ、シンクイムシの被害により廃園に追い込まれるところもあつた。明治38年に入つてりんご袋かけにより一旦は病害虫による恐慌は収まったかに思われたが、40年代に入つて再び病害の発生が続いた。そこで国から青森県農事試験場に三浦道哉技師が派遣され、ボルドー液の普及に努めた。三浦技師に替わつて、大正5年には、島善鄰^{よしちか}技師が同試験場に派遣され、青森県のりんご減収の原因を探るため県内各地を調査し、「青森県苹果減収の原因及びその救済策」として報告書をまとめた。病害虫対策では、共同防除の徹底であつた。県では、これにあわせ、動力噴霧器の導入も積極的に行つた。

島技師の対策には剪定法の改良もあつた。それまでりんごの剪定は2段3段造りで樹高が高かつた。これでは収量はあつても良果の生産ができないため、1段造りで半円形の樹形が良いと考えられた。これをいち早く取り入れていた生産者に外崎嘉七がいた。板柳町で開かれた剪定会で、あるハブニングが起つた。島技師が剪定法の改良の講義を行つた後、外崎翁が剪定の実技に移つた、その瞬間「かか

れ！」と弟子に命じた。弟子達はその園地の樹の2段3段部分をすべて切り落としてしまった。園主の顔は青ざめて家に帰ってしまったという逸話が伝えられている。島技師の業績はそのほかに施肥の改善、栽植様式の整理など多岐にわたっている。これらの業績は、青森県だけでなく、他県にも紹介され良果生産の礎となった。その後青森県のりんご産業は黄金期を迎えることとなるのだが、品種改良などの必要性が問われていた。こうした中、浪岡町出身の県会議員成田匡之進らの熱心な誘致運動により、昭和6年に「青森県苹果試験場」が黒石町に誕生した。土地は黒石町からの寄付、建設費は生産者、移出業者、黒石町からの寄付を募り建てられた。さらに成田等の働きにより昭和13年には藤崎町に国立園芸試験場東北支場が建設された。

世界の「ふじ」はこの東北支場から輩出されたわけだがこれについてはまたいつの機会かに詳しく述べたい。さてこの2つの試験場について戦後面白い逸話が残っている。戦後GHQが予算の無駄を省くために、国内を回っていた時、青森県に同じ様な試験場が2つあることが指摘された。これには、自身もりんご農家であり県会議員でもあった対馬竹五郎がGHQ職員に対応した。最初の握手でGHQ職員は納得したそうである。対馬氏の手は分厚くがっちりした手であったことから、「まさにこれは農家の手

である、あなたの意見は間違いない。」と存続が許されたとのことである。その後、2つの試験場は、共に名称が変更になり、藤崎町にあった国立園芸試験場東北支場は農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所りんご研究拠点（盛岡市）に、青森県苹果試験場は、青森県産業技術センターりんご研究所（黒石市）、として現在も存続し、研究成果を上げている。

2. 青森りんごの現状

表1に、平成27年産、国内りんごの生産量を示した。青森県は全国生産量の約58%を占めており、第2位の長野県の2倍以上を生産している。しかし、表2の世界のりんごの生産量を見ると、日本は19位となっており、日本以外の多くの国でりんごを生産していることがわかる。とりわけ、中国の4,000万トンという数字は驚異的である。

表1

平成27年国内のりんご生産量 811,500トン			
順位	都道府県名	生産量(トン)	割合
第1位	青森県	470,000	57.9%
第2位	長野県	157,200	19.4%
第3位	山形県	50,600	6.2%
第4位	岩手県	48,600	6.0%
第5位	福島県	26,300	3.2%
第6位	秋田県	22,900	2.8%
第7位	群馬県	9,280	1.1%
第8位	北海道	7,660	0.9%

(農林水産統計)

表2

2013年世界のりんご生産量		
順位	国名	生産量 (万トン)
1	中国	3,968.0
2	アメリカ	408.0
3	トルコ	313.0
4	ポーランド	309.0
5	イタリア	222.0
6	インド	192.0
7	フランス	174.0
8	チリ	171.0
9	イラン	169.0
10	ロシア	157.0
11	アルゼンチン	125.0
12	ブラジル	123.0
13	ドイツ	80.0
19	日本	74.0

(資料:FAOSTAT)

次に表3に青森県の品種別結果樹面積の推移を示した。これを見ると、「ふじ」、「ジョナゴールド」、「つがる」、「王林」といった主要品種の面積は若干減る傾向にあるもののそれほど大きな変動はない。しかし、かつて贈答用として用いられた「陸奥」は、平成18年以降その他の品種に組み入れられた。また、平成7年に期待の品種として登場した「北斗」は平成17年以降、やはりその他の品種に組み入れられた。一時は、「国光」「紅玉」に替わる品種として登場した「デリシャス系」も同じく平成17年にその他の品種に組み入れられた。表3で一番気になるのは、表の一番右端の栽培面積の推移である。平成2年に25,000ヘクタールあったものが、年々減少を続け、平成27年には20,000ヘクタールまで落ち込んでいる。直近の調査では、20,000ヘクタールを割り込んできている。これは、園地の老朽化と共に後継者不足が影響している。現在の青森県の労働力層の多くは60歳を越えた人たちであり、今後のりんご産業の課題であろう。

図1に青森りんごの輸出量を示した。平成14年

頃から輸出量が大きくのびているが、これは、台湾がWTOに加盟したことにより、これまでのりんごの輸入枠が撤廃されたためである。平成19年には、25,000トンまで増えたが、東北大震災後の放射能漏れの影響や、円高が響いて、平成23年には、10,000トンを割り込んだ。しかし、新品种「トキ」の登場や、輸出振興対策が功を奏して、平成26年には3万トンを突破した。これは九州への出荷量よりも多い数量で、りんごの価格安定に寄与している。

表4に平成27年青森県の品目別農業産出額を示した。りんごは、その他の品目を大きく引き離して約800億円と一位であった。また、その他のコメ、畜産、野菜の品目も多く産出額となっており、農業全体がバランスがとれているのが判る。これが、表5の東北6県の農業産出額の比較にも表れており、青森県が3,000億円と第一位となっている。資料としては載せていないが全国では第8位の生産額であった。このようなことから、農業業界の視点から見ると、東北、中でも青森県は、まだまだ開拓の余地を残していると思われる。

表3.品種別結果樹面積の推移

年度	品種 ふじ	ジョナ ゴールド	つがる	王林	陸奥	北斗	紅玉	デリシャス系	その他	計	参考 栽培面積
平成2年	10,400	1,400	2,000	1,850	1,170	-	280	2,850	3,793	23,800	25,300
7年	10,800	2,010	2,360	2,500	1,230	1,130	287	588	2,056	22,900	24,300
12年	10,400	2,650	2,360	2,490	1,020	819	312	191	1,629	21,900	23,400
13年	10,300	2,670	2,380	2,500	1,010	808	309	186	1,605	21,800	23,300
14年	10,300	2,650	2,380	2,490	973	-	-	-	2,850	21,700	23,100
15年	10,300	2,710	2,380	2,500	884	-	-	-	2,770	21,500	22,900
16年	10,300	2,370	2,710	2,480	876	-	-	-	2,770	21,500	22,700
17年	10,300	2,080	2,350	2,400	815	-	-	-	2,770	21,400	22,600
18年	10,300	2,650	2,350	2,430	-	-	-	-	3,570	21,300	22,500
19年	10,200	2,630	2,340	2,420	-	-	-	-	3,610	21,200	22,300
20年	10,100	2,570	2,330	2,300	-	-	-	-	3,510	20,900	22,200
21年	10,100	2,390	2,320	2,370	-	-	-	-	3,420	20,600	22,000
22年	10,000	2,200	2,310	2,300	-	-	-	-	3,300	20,200	21,700
23年	10,000	2,180	2,290	2,280	-	-	-	-	3,450	20,200	21,600
24年	9,900	2,150	2,270	2,250	-	-	-	-	3,430	20,000	21,400
25年	9,800	2,100	2,300	2,210	-	-	-	-	3,590	20,000	21,100
26年	9,770	2,060	2,290	2,200	-	-	-	-	3,680	20,000	21,000
27年	9,660	2,040	2,290	2,170	-	-	-	-	3,840	20,000	20,800

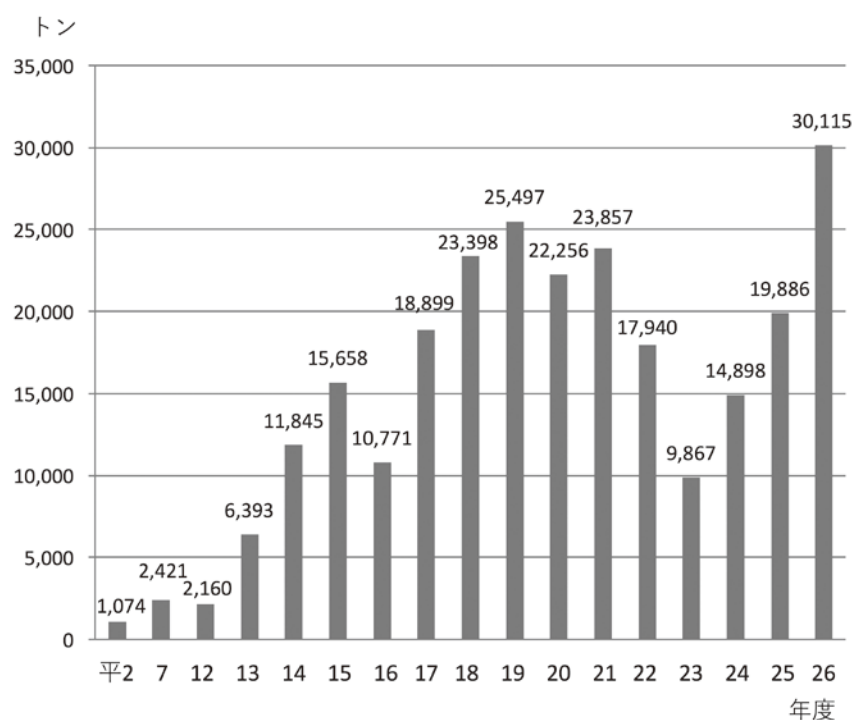


図1.青森県のりんごの輸出

表4.青森県の品目別農業産出額上位(2015年)

品目	産出額（単位：億円）
1 リンゴ	823 (800)
2 コメ	422 (388)
3 豚	258 (260)
4 ブロイラー	210 (201)
5 鶏卵	195 (181)
6 肉用牛	146 (143)
7 ヤマノイモ	127 (138)
8 ニンニク	176 (126)
9 ダイコン	95 (80)
10 ゴボウ	72 (76)

農林水産省まとめカッコ内は14年産出額

表5.東北6県の農業産出額(2015年)

県名	産出額(億円)
青森県	3,068
岩手県	2,494
山形県	2,282
福島県	1,973
宮城県	1,741
秋田県	1,612